

肇国記念館建設計画の挫折

民俗建築アーカイブ担当

The Failure of the National Foundation Memorial Hall
Construction Plan

Editorial committee

本学会前会長の佐藤重夫先生は、学生の頃から民家や社寺など日本建築に関心を持って取り組み、卒業論文は「岡山県に於ける民家と^{さむらい}士屋敷について」、卒業設計のテーマは「瀬戸内海国立公園リゾートホテル（塩飽諸島^{ひつし}櫃石島）」であった。どちらも郷里の自然と歴史に融合した日本の民家町並みを追究したものだ。その卒業設計で佐藤先生は「辰野賞」を受賞されている。佐藤先生は生涯においておよそ 130 件の建築を設計しており、その図面や写真が多く残されている。その設計の根底に流れているものは、常に座右の銘としている「日本には日本の建築を！」という岸田日出刀先生の教えであった。図面や写真は、佐藤先生が昭和 22 年から 33 年まで岡手で設計事務所を開設していたときのものが多く、戦後の復興に全力で取り組んでいる時のものだった。公共施設は予算がなくて中止され、設計図だけが残されているものもいくつかあって、戦後の世情を反映しているのは興味深い。写真 1 の「岡山県博物館案」（昭和 24 年 11 月）などは時期尚早とされ、博物館より市民の住宅を優先するときであったために、計画だけで終わったものであるが、この図面を見ても佐藤先生の作風が分かるものである。



さて、そんな設計の中で数種類の異質な図面が見つかった。どれも戦前の旧満州国にあった国粋主義を反映したような建築である。名称や制作年が不明のものが多い、その中に「宣詔記念館」と記されて一式そろった図面がある。宣詔記念館とは初めて聞く名前である。それともう一つ、「^{ちようこく}肇国記念館競技設計図案 三等一席 佐藤重夫氏案」と書いてある図面のコピーが一式（4 枚）あった。原図面は探したが見つからない。競技設計で入選した図面は戻ってこないのが普通だ。これは入選記事を載せた雑誌か何かのコピーであろうと思ったが、いずれにしてもこの二種類の図面は建設までには至らなかつたものであろうか。この競技設計のことすらも戦前の建築史から忘れられている。その詳細も気になる所であるが、更にこの設計が佐藤先

生の座右の銘とする作風とは程遠く、国粹主義の顕現であり、宣詔とか肇国という耳慣れない語にも関心が湧いて来る。民俗建築アーカイブの対象となるものであるか否か迷うところであるが、建築家佐藤重夫が若い日に取り組んだ作品の一つとして、そして戦前の建築史に記しておくべきものとしての意義を感じるのである。

本稿ではまず「^{ちやうこく}肇国記念館」について取り上げ、「宣詔記念館」は次号の「民俗建築アーカイブ⑭」で述べることにする。

先ず「^{ちやうこく}肇国記念館」とは何か、肇国とは国の始まりという意味である。すなわち日本の建国である。このことは明治5年の政府の布告から述べなければならない。明治5年に日本政府は欧米など国際社会にならって西暦を採用し、同時に太陽暦に切り替えた。その手段は極めて直^{ちよく}截^{せつ}的で、明治5年12月4日を明治6年1月1日としてスタートする大改革であった。長く続いた日本の暦はここでリセットされた。このときから明治6年という年号と西暦1873年を併用する時代が始まったのである。ただ、ここでややこしいのは、もう一つ新しい年号が誕生したことである。西暦はキリストの誕生を起点としたものであり、日本の歴史とは何の関係もない。日本には日本独自の建国から数える年号があってしかるべきだという考えで生まれた年号である。日本の建国については何の科学的根拠はないが、当時の政府は日本書紀にある「神武天皇が即位された年」をもって建国されたとし、この年を紀元（皇紀）元年と定めた。これは西暦でいうと紀元前660年に当たる年だという。すなわち皇紀の年号は西暦よりも660年多いものとなる。例えば明治5年（1872）は紀元2532年である。この皇紀は日常の生活とは直接結びつかなかったが、軍国主義に進むにつれて存在感が大きくなっていった。そして昭和15年（1940）は神武天皇即位から2600年、すなわち紀元2600年であり、日本国建国の大きな節目の年なのである。それを10年後に控えた昭和5年頃から紀元二千六百年祝典の行事を取り組む機運が高まっていった。たとえば昭和6年（1931）には、1940年に開催されるべき第12回オリンピック競技大会を東京市で開催する機運が高まり、昭和7年（1932）に候補地として正式に立候補した。そして昭和11年（1936）の国際オリンピック委員会（IOC）で、東京府東京市で開催されることが決まり、9月21日～10月6日までの日程が予定された。また、その年に行われる第5回冬季オリンピックも札幌で開催されることが決まった。オリンピック史上初めて欧州以外の国で開催されるオリンピックであった。

一方では昭和10年（1935）2月11日「紀元節の日」、日本政府は紀元二千六百年記念日本万国大博覧会の開催計画を世界に発表した。昭和15年3月15日から8月31日まで開催する計画である。場所は東京市京橋区月島地先4号埋立地（図1）を予定し、博覧会会場にはこれを記念して「建国記念館」という大ホールを建設することになった。これを設計競技方式にして一般から募集したのである。設計競技の募集が公示された昭和十一年当時は、政府も本気で

万国博覧会記念館の建設に取り組み、建築は「紀元二千六百年を記念するに足るべき重要建築物なるを以て其の建築様式は日本精神を象徴したる荘嚴雄大なるものたるべし」とうたっている。このとき佐藤先生は大学を卒業して渡辺仁建築工務所に勤めて4年目の年で、同僚の大澤浩氏と競って応募した。募集は昭和12年11月1日で締め切られ、総数108通の応募に上った。これを佐野利器、武田五一、内田祥三、佐藤功一、大熊喜邦他四名の審査員が二日間にわたって審査した。すぐに入賞作品が発表されたが、それを知った佐藤（以下敬称略）は信じられない思いで目を疑った。一等（1名）高梨勝重、二等（2名）一席高梨勝重、二席清岡宏彩、三等（4名）一席佐藤重夫、他3名、佳作（6名）六席大澤浩 となっている。佐藤は三等一席、同僚の大澤浩氏も佳作六席に入り、佐藤の勤める渡辺仁建築工務所の名声を高める一翼を担ったことを喜び合った。それにしても一等と二等を独占した高梨勝重氏とはどんな人なのか、驚くばかりである。

さて、その頃は政府も国民も国威発揚に向け平和な計画を進めていたが、日本軍には不穏な空気が漂っていた。12年の7月7日に北京郊外の盧溝橋で発砲事件（盧溝橋事件）が勃発し、これが引き金になって日中間の戦闘が始まり、いわゆるシナ事変の泥沼に陥っていく。この收拾もつかず、国際関係も不穏になっていく状況で、国は祝賀行事などを行う余裕がなくなってきた。昭和13年7月15日、政府は「重大時局」を理由にすでに国際的に決まっていた昭和15年の「東京オリンピック」返上を決定し、これに併せて万国博覧会の企画延期を決定したのである。

佐藤らが受賞の感激から8か月後に政府が突然博覧会中止を決めたのだから驚きである。入賞者の図面は返却されない上に企画そのものが白紙に戻って、佐藤たちの落胆は大きかった。応募者の図面は一切、日の目も見ずに処分されてしまう。しかし偶然な幸いはあるものである。政府が万博中止を発表する1カ月前の6月3日、入賞者の建築図面55枚が編者日本万国博覧会会長藤原銀次郎の名前で印刷されて『肇国記念館懸賞競技設計図集』（写真2）という名称で洪洋社から出版されたのである。「建国記念館」という名称は受賞者発表後に「肇国記念館」と改称されている。洪洋社は白茅会編『民家図集』を発行した出版社であるが、さらに奇縁なのは肇国記念館の一等入選者である高梨勝重氏は洪洋社社長高梨由太郎氏の長男である。由太郎氏にしてみれば、息子勝重の名誉ある一等入選の喜びもつかの間、万博中止の情報をいち早く得て、せめて入選者の図面を写真集として残しておきたいと思い、博覧会会長藤原銀次郎氏に話をもち込んだのかもしれない。由太郎氏は図集の出版後、その年に突然亡くなっている。父が息子に残してやりたい思いがあったのか、事実は分からない。ただ、当時の佐藤は何も知らないままに、『図集』を喜んで買い求めた。金三円であった。この本のお陰で佐藤は図面を

手元に残せたのである。先に述べた図面のコピーは雑誌に載ったものではなく、この『図集』をコピーしたものであった。この『図集』は今も佐藤の書斎に並んでいる。

ところで、出版して一か月後に大博覧会の企画がすべて中止されてしまった洪洋社にしてみれば、この本の価値がどうなるのか、買い求める人がいないのではないか、あるいは歴史的肇国記念館を作ろうとして努力した建築家たちの設計図集が幻の稀覯本となって、価値が高まったのか、いずれにしても戦前の建築史の裏面に残る興味深いことであった。

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。無料で提供します。民俗建築アーカイブ担当 古川修文 syu-bun@jcom.home.ne.jp